

本を選ぶ

NO.442 2022年(令和4年)3月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒114-0002 東京都北区王子 4-23-4 TEL=03-6908-4643

●<ろん・ぼわん>乳香続々

●選書の法則：S.R. ランガナタンからの187のメッセージ(19)

●彩り・・・ディスレクシア・・・

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

乳香続々

去年の年末近く、近所では名物だった榊(タブノキ)の老木の前を通りかかると、3分の2ほどに伐り下ろされてしまっていた。樹齢数百年とおぼしきこの樹は大きくなりすぎて、もてあまされたのか。それとも他に避けたい理由があつての所業か。榊は高々と伸びていた太い枝のかなりを失って、間の抜けたような佇まいがまるで呆然としているかに見える。思わず樹木に同情してしまうこの気分は、冷たく言えばこちら側の感情移入なのだろうか。

榊には赤みの強い材と白い材があつて、昔から赤身は高級材だと木工仲間は言う。材木市場で赤身の榊が出るとそれなりの高値で取引されるそう。桑や樺などと同じく銘木として扱われ、上等な指物細工に仕立てられる。また織物や染織に通じている人なら草木染めで名高い八丈島の伝統工芸品、黄八丈の3色のうち鶯色に染め上げる原料としてこの榊の樹皮が欠かせないとご存知だろう。島に自生する榊は赤身に違いないと勝手に思う。ついでながら絹糸を黒色に染めるためにはやはりスダジイの樹皮が必要である。

人間は古来より草木の偉大な力を知り、利用してきた。乳香や没薬にしてもそれぞれの樹木が分泌する成分が芳しい薫りや抗菌作用をもたらしてくれる

と知って珍重し、薫香しさらに精油を抽出したりして宗教行事や王侯貴族の暮らしを彩ってきた。

樹木には驚くべき能力があり、さらには社会性すらあると主張するペーター・ヴォールレーベンの『樹木たちの知られざる生活—森林管理官が聴いた森の声』(長谷川圭訳/早川書房/2017)は興味深い本かもしれない、と思ってツンドク本となっていたのだが、この機会に読んでみた。

同じ種の樹木同士の「友情」や「コミュニケーション」(連携?)、樹木が感じる「痛み」など、次々に繰り出されるいわば人間的で情緒的なストーリーが、興味深いと言うよりは、かなり刺激的である。読み始めてすぐに思い出したのが、植物にモーツァルトを聴かせる、というニューサイエンス系というか神秘ネタの類だ。実際に今でも野菜畑に向かって真剣にモーツァルトの音楽を流している農家があるらしい。おいしく食べられるような生育を野菜に促すのだ。いわゆる「モーツァルト効果」を農作物に期待しての「農業技術」なのか。

ヴォールレーベンの本はドイツで著者も驚くようなベストセラーとなったが、そこに反論の狼煙を上げたのがフランスの哲学者ビュルガで、『そもそも植物とは何か』(フロランス・ビュルガ著/田中裕子訳/河出書房新社/2021年)を発表して、「植物には感覚も知性もない。喜びや悲しみや怒りも感じない」と執拗に、哲学的に論証してみせる。

榊について語った仲間が、榊はお香の材料でもある、と教えてくれた。榊には香り成分は無いものの、つなぎとしてお香を練り上げるそう。 (埜村 太郎)

選書の法則： S. R. ランガナタンからの187のメッセージ (19)

吉植 庄栄

19. 選書論と図書館情報資源概論

(1) 選書論の講義

第三法則君のターンが終わったので、定例の雑談をする。転職後の担当は司書資格科目であるが、その中に「図書館情報資源概論」という1年生後期の基礎科目がある。正直に白状すると転職する前は現行の課程に無知で、ランガナタンが名著をもって示した「選書」に関する講義は日本の司書養成のカリキュラムに無いと勘違いしていた。お恥ずかしい限りである。文部科学省ウェブサイトには、当科目を以下のように示している。

印刷資料・非印刷資料・電子資料とネットワーク情報資源からなる図書館情報資源について、類型と特質、歴史、生産、流通、選択、収集、保存、図書館業務に必要な情報資源に関する知識等の基本を解説する。^注

この中の「選択・収集」が「選書」に当たる。「図書館選書論」という科目は単独で存在しないが、そのような訳でこの概論の前半部分で選書の講義を行っている。

あくまでも、インドで入手したランガナタン『図書館選書論 第2版』の内容を分かりやすく広めるための当連載であるが、講義内容作成に役立つのみではなく、課題文としての効能もあった。受講生に既刊分を毎週読ませるのだが、いつも配る論文よりも分かりやすいので学生の評判は良い。これに気を良くしてそろそろ連載を再開しようか、と思いついたのが丁度昨年今ごろである。

提出課題を読むと「選書とは選ぶのではなく、除くことである」というランガナタンの言葉に感銘を受けた、という感想が多く寄せられる。この部分のランガナタンの原文はこうだ。

選ぶことは自動的に除くことである、ということをおぼえてはいけない。選択と除外は1つの

行為を2つの側面から観たものに過ぎない。

はじめてこの箇所差し掛かった時、筆者自身が逆説的な発想に非常に驚かされた。ランガナタンの著作にはこのような哲学っぽい表現がしばしば現れる。たまたま好きだ。そして、面白いと思った箇所を学生に共感してもらえると、さらに嬉しい。

(2) この講義の改革

一方この科目はいわゆる図書館資料論なので、図書館の資料種別や歴史、図書館での運用の基礎について教えることも重要である。例えば、図書館の所蔵資料には、図書や雑誌、新聞といった印刷資料がある。その図書にも文庫や新書、叢書や参考図書といった様々な種類がある。また視聴覚資料やマイクロフィルムといった非印刷資料、それからここ数十年で爆発的に増加した電子資料がある、といった内容である。これらの発展史や図書館での管理や配架の手法について等、様々なことを教えねばならない。

しかし4年目を終えてみて、選書ばかり印象に残り、すっかり他の内容が頭に残っていない受講生が多いことに気づいた。最終のレポート提出物がそれを毎年物語っている。レポート課題は、任意の図書館を選びその図書館の選書方針と資料種別に注目した配架の特質を報告する、というものである。特に後半は任意の図書館の返却アルバイトになったつもりで書架配置と資料種別のマニュアルを作成するように書きなさい、という指示をする。前半の選書はしっかり書いてくる者ばかりだが、後半の配架は、ウェブサイトから入手した図書館の資料配置図を貼り付けて終わる者、各フロアを短文で説明して終わる者といった当方を失望させるレポートが大半である。

これまで後半の出来の悪さへの対策を色々講じていたが、ある時に前半の選書に原因があるので

はないかと閃いた。自分の研究テーマだから詳しく丁寧に説明してしまうためや、選書の演習をすることで受講者の記憶に強く残るためであろう。

悩んだ結果、令和4(2022)年度からは、自分にとって美味しい選書論は最後に取っておいて、資料論を最初にやることにしてみる。理由としては、先に示した内容が受講生の印象に残ること、そして受講生も余裕を持って実地調査ができることが挙げられる。産まれてはじめて見たものを親と思う鳥ではないが、これで些かは資料論部分の不出来が解消されるだろう。加えてうすうす気づいていたが、課題設定が変だ。返却本を書棚に戻すアルバイトはあっても、選書業務のアルバイトは無いだろう。せいぜい学生サポーターやボランティアに、利用者目線で資料を選んで下さい、というようにイベント的をお願いするくらいではなからうか。

(3) 理想の書架配置

更に現4年生の弟子(卒論指導生)が、理想の書架配置について4万8千字の大作を書き残してくれたことが大きい。本学の規程では約2万字で卒業だが2回卒業できる。

彼女は実際の図書館を約30館見学し、図書館建築の第一人者の植松貞夫先生の著作から得た書架配置の理想型に基づきそれらを評価し、基本的な王道と個別事例をつぶさに比較検討した。その結果を視点として、近所の盛岡市都南図書館の書架配置を吟味し、一部改善提言をしたものである。彼女の主張は、理論的に書架配置の王道は確かにあるが、その図書館の特性や周囲の環境、利用者の傾向に基づき各館の「理想」は変わるというものである。まさにその土地が、その図書館の書架を決めるのである。完成度がすこぶる高く、実際に都南図書館から乞われて職員に発表をも行った。

この論文のおかげで、指導をしながら自分も書架配置を改めて学んだのである。自分と彼女は全くの別人格であり、興味や視点が全く異なる。この理想の書架配置という研究は、今回のような機会が無ければ自発的に探究しないであろう。自分はただ彼女が切り拓いた道を伴走し、ついて行っ

たのである。前職で愛したレファレンス業務もそうであったが、自分では関心が無い内容を一緒に同行することで、自分の幅が広がる。

話は図書館情報資源概論に戻るが、学ばせていただいたこの内容は、是非後輩達に届けたい。講義に盛り込もうと思う。理想の書架配置と資料論を絡めて解説すれば、これまでの抽象的な講義もより具体的になるに違いない。そして自分が本学でこの講義を担当している限り、彼女の精神も後輩たちに何らかの形で伝わって行くに違いない。

(4) 出藍の誉れ

彼女をはじめとして今年是指導学生に恵まれた。青森市民図書館の複合施設化の歴史的経緯を辿りその試みを検討した者、北海道滝川市立図書館のテーマ別書架配置を研究した者、そして、自分の出身の街を本の街にするにはどうするか?という論文を書いた者、この4名は特に秀逸だった。

どの者も文献や実地調査を重ね、それぞれの主張を悔いなくまとめ上げた。興味深いのは、この4名とも全然違う観点であるにも関わらず、完成した論文にはお互い何か関連していることである。例えば、先述した理想の書架配置研究の結果、館内のデッドスペースでは魅力あるテーマ別書架を配置すべきであると筆を置くことで、滝川市立図書館を研究した彼女との内容につながりをみせる。どの者もどこか別の作品とこのような繋がりがあ。終わってみれば皆、「理想の図書館とは何か?」という山を思い思い別々の登山道を昇っていたに過ぎない。山頂で全員が健闘を讃えあって、思い出深い1年になった。そして、一番学んだのはきっと自分である。

『荀子』の勸学編に「青は之を藍より取りて、藍よりも青し」、いわゆる出藍の誉れという言葉がある。自分ごときには勿体ない弟子達であった。この誌面を借りて感謝するとともに、今後皆の活躍を切に願うものである。

(よしうえ しょうえい：盛岡大学文学部)

注：文部科学省．“司書資格取得のために大学において履修すべき図書館に関する科目一覧〔13科目24単位〕”．文部科学省ウェブサイト．https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiledfile/2009/05/13/1266312_8.pdf．(参照 2022-02-24)

彩り・・・ディスレクシア・・・

神部 京

読み書きは人とのコミュニケーションや情報を得る上で必要な手段の一つである。今回はそうした読み書きに困難を抱えるディスレクシアについて作品を通して触れていきたい。

『グリーンフィンガー 〈約束の庭〉』（ポール・メイ作／シャーン・ベイリー絵／横山和江訳／さえら書房／2009）

ケイトは絵本を読んでもらうことが好きだった。けれども、自分で絵本を読める時期になっても、文字がくねくねしたかたまりに見えて読むことができない。文字が読めないことにコンプレックスを抱えていたケイトは心を閉ざしていく。だが、引っ越しを機にある老人と出会い、ケイトは植物を育てることに興味を持った。老人は植物を育てることが上手なグリーンフィンガーだった。ケイトは庭仕事を通して自分なりの生き方を模索していく。



『11をさがして』（パトリス・ライリー・ギフ作／岡本さゆり訳／佐竹美保絵／文研出版／2010）

サムは11歳の誕生日に幼い頃の自分が載っている新聞記事を見つけた。記事の内容を追ったがほとんど読むことができない。サムは読み書きが上手できないディスレクシアという学習障害があるからだ。それでもなんとか「行方不明」という文字は分かった。



サムは自分の生い立ちについて知りたくなり、転校生のキャロラインに記事を読んでもらい真相解明に協力してもらうよう頼んだ。少ない情報の中からヒントを探り物語はミステリーのように進んで行く。

『木の中の魚』（リンダ・マラーリー・ハント著／中井はるの訳／講談社／2017）

図工や数学は好きだけど読み書きが苦手な難読症のアリーは自分に自信がなかった。『どんなにがんばっても、努力が足りないって言われる。雑すぎる。つづりのうっかりミスだらけ。同じページで同じ言葉のつづり方がバラバラだと注意される。そして頭痛。白い紙に黒い文字があるのをずっと見ていると、まぶしくて、いつも頭痛がする。』とアリーは感じていた。転機が訪れたのは、産休をとる先生の代わりにやってきたダニエルズ先生との出会いだった。先生は、アリーには特別な学習法が必要だと提案し、ディスレクシアでも活躍している有名人の話をしてくれた。その一人、絵本作家のパトリシア・ボラッコについては実話を絵本にした『ありがとう、フォルカーせんせい』、『ありがとう、チュウ先生』がある。恩師との出会いによってその後の人生が切り開かれていく。



『ぼくの帰る場所』（S・E・デュラント作／杉田七重訳／すずき出版／2019）

11歳のAJの両親には学習障害があり、身の回りの生活で困ることがあると近所に住むおじいちゃんが代わりに行っていた。先生にあなたのパパとママは特別なよと言われたことがあった。そのことをおじいちゃん話したら「きっと先生は、おまえの両親はほかの人とはちがうといたかったんだろう。ふつうとちがうのは問題だと考える人もいるが、ほんとはとてもすばらしいことなんだ。おとなでも子どもでも、自分とちがっている人間ははねつけることが多い。だがおじいちゃんにしてみれば、ちがっていたってなんの問題もない」と言っていた。



頼れるおじいちゃんが亡くなってしまった後、

主に家計のことがAJの心配事となった。けれどもAJは両親のことを面倒見ているというつもりはなかった。お互いに助け合って暮らしていると感じているからだ。AJは自分にとって大切なものとは何かを見付けていく。

文字が読めないことで負い目を感じ、自分自身を肯定的に捉えることが出来ない登場人物達の姿がある。特性そのものについて理解を示し改善に向けた指導や、苦手な事を補ってくれる支援者達によって、世界の捉え方が変わっていく。当たり前という前提は何一つ存在せず、常に人との関わりは築きあげていくものであると感じさせられた。(かんべ みやこ)

●●●●●●●●●●**よはく**●●●●●●●●●●

■コロナ禍が続く中、3度目の年度末そして新年度となる。社会生活の有り様は大きく変わってしまったが、案外図書館は健在に見える。これをきっかけとして蔵書の一部を電子図書館化する事業を進める公立図書館もふえていくことだろう。

■都市部の街中では、小さな書店が様々な形態で展開されている。増えてきたシェア本屋もそのひとつだ。棚貸しの本屋で、市民とか本に関わる人が手持ちの本を自分の棚として出店している。そこには交流に近いやりとりが生まれているようだ。人と人をつなぐアナログと、そしてIT(お)